

釜ヶ崎の守護神「カマヤん」と「カフカの階段」その後

福島 利夫

はじめに

2018 年の 2 月 28 日（水）から 3 月 3 日（土）にかけて、社研の春期実態調査で大阪にでかけた。その行程の中に、3 月 1 日・午前の西成区長による「西成特区構想」についてのレクチャー、3 日・午後の釜ヶ崎（行政地名：あいりん地区）視察が入っていた。

社研の実態調査で大阪の西成・釜ヶ崎を訪れたのは 6 年ぶりである。前回は、社研のグループ研究で、経済学部内の「福祉と環境コース」のメンバーで、「自治体による就労支援」をテーマにして、堺市、豊中市、箕面市なども訪れた。詳細は、社研の月報 No.597（2013 年 3 月 20 日発行）に寄せた高橋祐吉所員の「大阪調査覚え書き—自治体による就労支援のさまざまなかたち—」をご覧ください。前回の日程は、2012 年の 2 月 27 日（月）から 3 月 1 日（木）である。わざわざ曜日を入れたのには訳がある。気がつきにくいですが、4 年に一度のうるう年なので 2 月 29 日（水）が入っていることと、もう一つは釜ヶ崎を訪れた曜日の違いである。前回は、28 日（火）の早朝に西成労働福祉センターを訪れた。今回は 3 月 3 日（土）の午後なので様相はまるで違っている。ついでに言えば、前回は経済学部の中の小さなグループであるが、今回は OB である参与の方々も含めて、6 学部にわたり、20 人近い参加者となっている。

一 西成特区構想

最初に、行政側からみた西成区と釜ヶ崎（あいりん地区）の近年の施策の現状を大前提として取りあげたい。3 月 1 日（木）午前、西成区役所で横関稔区長から「西成特区構想」についてレクチャーを受けて質疑応答をおこなった。

橋下徹市長が 2011 年 12 月に就任し、2012 年から「西成特区構想」の検討が開始された。その結果、2012 年 10 月に西成特区構想有識者座談会報告書（8 分野 56 項目の具体的提言）ができあがり、それにもとづいて 5 年間（2013 年度～2017 年度）の取り組みがおこなわれてきた。引き続き次の 5 年間の計画も予定されている。

レクチャー資料によると、西成区の抱える諸課題等としては以下のことが挙げられる。

1. 少子高齢化：2010 年の人口は 15 歳未満割合 7.6%、65 歳以上 34.3%であり、同時にこれらの数値は「2040 年の大阪市」の姿でもある。

2. 不法投棄：あいりん地域を中心として、ごみの不法投棄が後を絶たない。
3. 迷惑駐輪：あいりん地域内では、道路上の迷惑駐輪が非常に多い。
4. 治安：路上における覚せい剤の売買、違法露店営業など。
5. 結核：西成区における結核罹患率は、大阪市の約4.5倍。
6. 野宿生活者：シェルター利用者や路上、公園等で暮らす野宿生活者等が多数存在。

そしてこれらのまとめとして、大阪市の様々な課題が西成区に集約されているということと、課題解決には「まちの活性化・イメージアップ」、「若者や子育て世帯の流入促進」が必要ということが挙げられている。

上記の報告書にもとづく、西成特区構想5年間の主な取り組みは3つに分類される。

A 短期集中的対策

主な取り組みは、①不法投棄対策、②落書き対策、③迷惑駐輪対策、④防犯対策、⑤結核対策であり、それぞれに具体的な成果を上げている。

B 中長期的対策

主な取り組みは、①プレーパーク事業：こどもの生きる力を育む居場所として実施し、3つの場（遊び場・学び場・たまり場）を展開、②簡易宿所設備改善助成事業：大阪の外国人観光客等の増加に対応。

C 将来のための投資プロジェクト・大規模事業

①あいりん総合センター建替え：市営萩之茶屋住宅及び大阪社会医療センターの移転、労働施設の仮移転について合意。

最後の総括で、最も強調されているのは、この西成特区構想が行政主導ではないことである。すなわち、地域住民や様々な活動をしている人々が主体となる「ボトムアップ方式」による議論の仕組みができたことが、特区構想推進の大きな原動力であると結んでいる。

この西成特区構想については、橋下徹市長の特異なキャラクターとも相まって、当初から懐疑的な見方も多いことは事実である。スラム・クリアランスあるいはジェントリフィケーション（地域の高級住宅街化）がその狙いではないかということである。つまり、現在の釜ヶ崎住民の放逐である。

これに対抗する戦略として、両刃の剣の可能性を逆手に取って、むしろ絶好のチャンスとして地域に根ざした住民ネットワークを活かした地域づくりをおこなおうとしたのが、いろいろなグループを統括した、あいりん地域まちづくり会議である。この点については、後でもう一度取りあげたい。

二 「カフカの階段」

1. 「カフカの階段」とは何か

貧困問題を考える手がかりとして、「カフカの階段」を見てみよう。これは、生田武志『貧困を考えよう』（岩波ジュニア新書、2009年）で紹介しているものである。

この図1は、本文1ページの始まる直前のページ（x ii ページから x iii ページ）に掲げられている。そして、図のさらに前には目次のページ（x ページから x i ページ）がある。つまり、これら全体が本書の導入部分となっている。

この図には、こまごまとした説明文が手書きの部分も含めて添えられている。ただし、本文の箇所として説明がおこなわれるのはずっと後のページである。154 ページに、『カフカの階段』で貧困問題を考える」という小見出しが登場し、そこから説明が始まっている。

まず、「カフカの階段」の命名の由来である。小説家フランツ・カフカはその作品の『変身』などで「不条理」を表現することで有名である。そのカフカが父にあてて書いた手紙『父への手紙』（飛鷹節訳）の以下の部分より命名している。

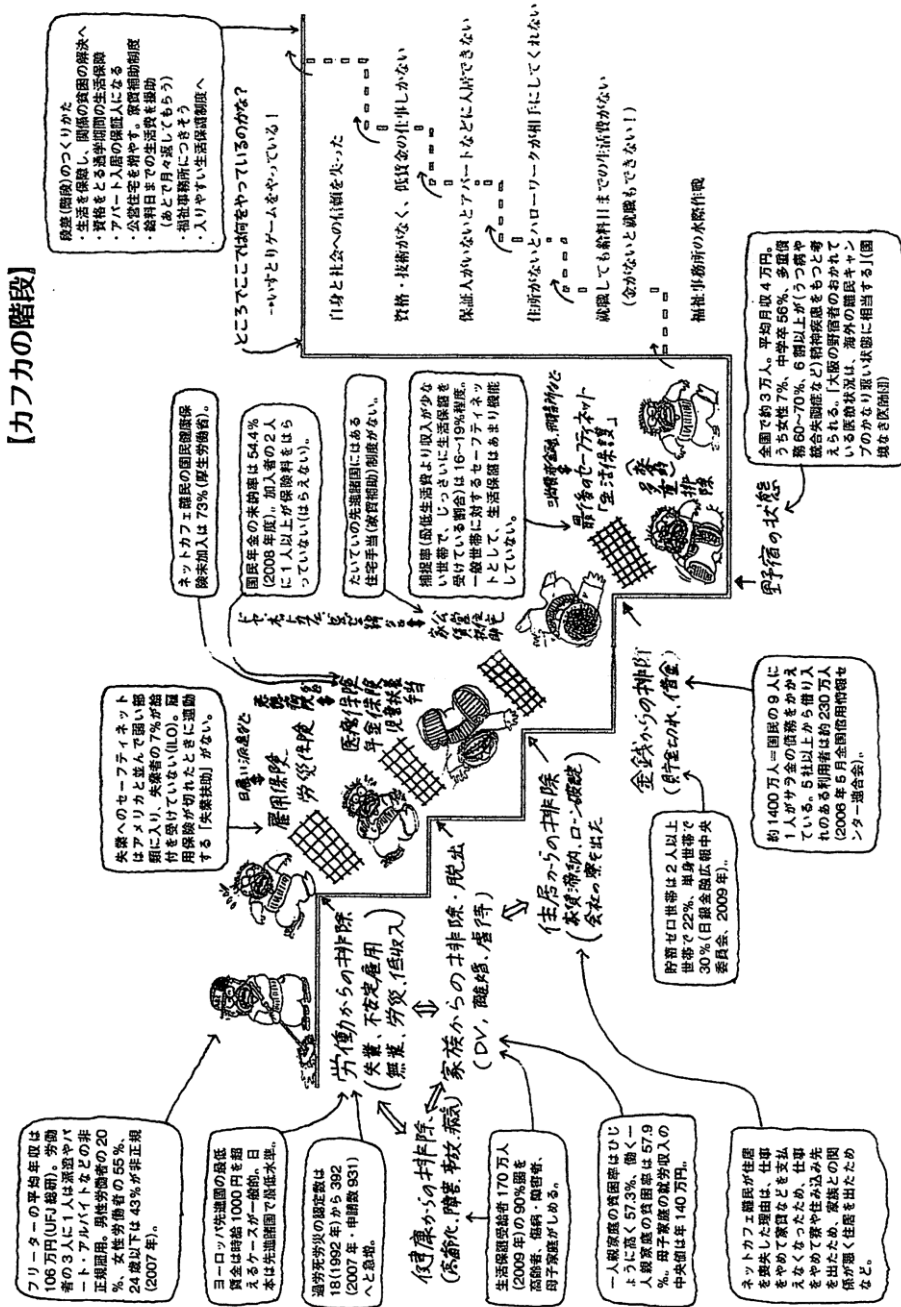
「たとえてみると、ここに二人の男がいて、一人は低い階段を五段ゆっくり昇っていくのに、別の男は一段だけ、しかし少なくとも彼自身にとっては先の五段をあわせたのと同じ高さを、一気によじあがろうとしているようなものです。先の男は、その五段ばかりか、さらに一〇〇段、一〇〇〇段と着実に登りつめていくでしょう。そして振幅の大きい、きわめて多難な人生を実現することでしょう。しかしそのあいだに昇った階段の一つ一つは、彼にとってはたいしたことではない。ところがもう一人の男にとっては、あの一段は、険しい、全力を尽くしても登り切ることでできない階段であり、それを乗り越えられないことはもちろん、そもそもそれにとつづくことさえ不可能なのです。意義の度合いがまるでちがうのです。」

つぎに、階段を転げ落ちている主人公のキャラクターの説明である。漫画家ありむら潜の「カマヤん」だと、とりあえずはごく簡単な説明にとどまっている。もっとも、よく見ると、本書の他の箇所でもありむらの別のキャラクターが起用されている。それは、本書の導入ページ（v ページから vi ページ）の「自立って……」の箇所である。セーフティネットがどんどん無くなっていった、その上に立っている、キャラクターの1人であるアイリーンがおしまいに転落する姿が描かれている（ありむら潜『カマヤんの野塾』より引用）。

そして、表紙カバーである。同じくセーフティネットが破れて大きな穴があいているところに、何人かの人たちが落ちていて、それを引っぱり上げて助け出そうとしている人もいる。そこには、カマヤんもいるし、フワフワくんらしき人もいる。さらに、表紙カバーの上に巻かれている帯である。ここでは、アイリーンがセーフティネットの上に立ちながら、「貧困をカバー

図 1 カフカの階段 1 (詳細)

貧困(=野宿)になるときは段々だけど、もどるときは1段になっている!



xiii

してくれるネットはどこにあるの？」と訴えている。ここで登場したキャラクターたちについては後ほど改めて紹介したい。

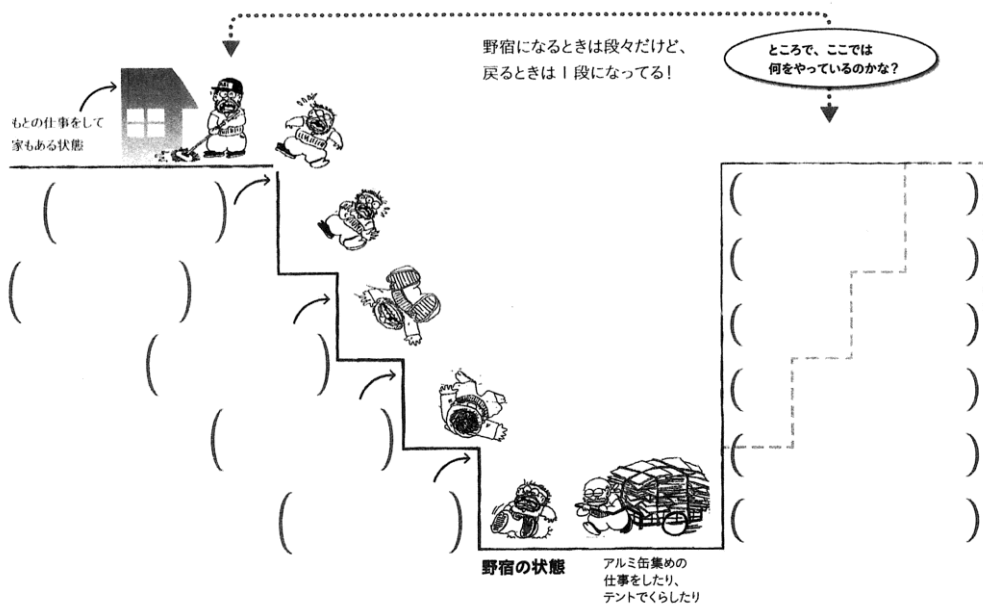
ところで、この「カフカの階段」の最初の出現はもう少し以前のことである。同じ著者の『ルポ最底辺——不安定就労と野宿』（ちくま新書、2007年）に掲載されている。ただし、この図（227ページ）では、転落途中の説明文がまったく無く、空欄の（ ）になっている。説明は、図中ではなく、図外の本文でおこなわれている。この点は、本書を改定増補して書名も変えた文庫版『釜ヶ崎から—貧困と野宿の日本—』（ちくま文庫、2016年）でも同じ扱い（314ページ）である。

同じ著者の最近の著作『子どもに「ホームレス」をどう伝えるか—いじめ・襲撃をなくすために—』（生田武志・北村年子著、一般社団法人ホームレス問題の授業づくり全国ネット編・発行、2013年）では、「カフカの階段」の図の空欄（穴あき）になっている図2（55ページ）と合わせて、次のページでその空欄に記入（穴埋め）した図3（56ページ）が同時に掲載されている。もっとも、この図3の説明は図1よりも簡潔なものになっている。

なお、本書では、『貧困を考えよう』で起用されていた、アイリーンによる「自立って……」の図の引用が1ページにまとめられている（21ページ）。

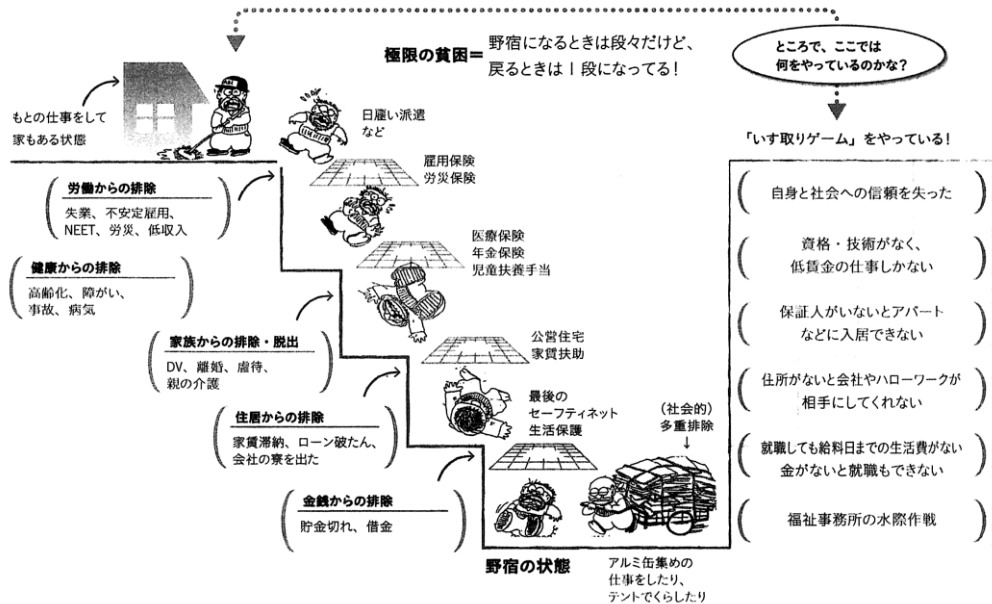
また、あまり目立たない工夫として、読者サービスのもう一つ細かな仕掛けが施されている。

図2 カフカの階段2（穴あき）



出所：生田武志・北村年子『子どもに「ホームレス」をどう伝えるか』2013年、55ページ

図3 カフカの階段3（穴埋め）



出所：図2と同じ、56 ページ

それは、奇数ページ（左側のページ）の左下に小さく描かれているコマやんの物語（3 ページから 183 ページ）である。これはパラパラ漫画の試みである。最初のコマやんは右手に「賃金」と書いた封筒、左手に商売道具のスコップを持って現れる。ところが、つまづいて倒れて気がつくともなく2つとも無くなっている。探しているあいだに、またつまづいてどんどん転落していくが、壁が高すぎて元に戻れない。途中で野良犬（コマワン）も出てくる。その後、支援者が2人出てきて、その助けにより、段差を一段ずつ登って、ついに壁の上に到達する。最後は、「賃金」とスコップを再び手にして退場する。メデタシ、メデタシ。何のことはない。これは、もう一つの「カフカの階段」の図である。

2. 「カフカの階段」の展開

生田武志『貧困を考えよう』では、図1の転落を順に取りあげて本文で説明を加えていく。「労働からの排除」、「健康からの排除」、「家族からの排除・脱出」、「住居からの排除」、「金銭からの排除」である。

そして、最終章（6章）「貧困の解決のために」で、「壁から階段へ」と提起する。まず、「壁」（＝むずかしい条件）とは、つぎのようなものである。

1 福祉事務所の水際作戦

- 2 就職しても給料日までの生活費がない（お金がないと就職もできない！）
- 3 住所がないとハローワークが相手にしてくれない。
- 4 保証人がいないとアパートなどに入居できない。
- 5 資格・技術がなく、低賃金の仕事しかない。
- 6 自分と社会への信頼を失った。

これらの問題（＝壁）の解決のためには、段差を入れることを指摘する。具体的には、

- 1 福祉事務所に行っても追い返される人には、ぼくたち〔筆者注：著者が関わっている野宿者ネットワークなどの支援団体。以下同じ。〕が役所に同行する。支援者、そして司法書士や弁護士が同行すると福祉事務所はあっさり生活保護を認めることが多い。
- 2 ぼくたちがアパート入居の保証人や緊急連絡先になることもできる。
- 3 給料日までの生活費を援助する。ぼくたちは、就職しても一ヵ月先の給料日までの金がない人には、「お金を貸して、あとで月々返してもらう」支援をおこなっている。
- 4 生活を保障し、「関係の貧困」の解決へ、生活保護などで経済的に生活を安定させたいうえで、社会とのかかわりを回復して、自分と社会への信頼をつくっていくことが重要である。さらに、行政の出番として、
- 5 公営住宅を増やす。家賃補助制度をつくる。
- 6 職業訓練や通学のあいだの生活を保障する。

以上のように、「段差をつくる」ことが、つまり衣・食・住にわたる社会的な支援が必要だと、結論づけている。

もう一つ、「カフカの階段」図の右側最上段の部分に、「ところで、ここでは何をやっているのかな？」とある。これについて、ふつうの答えは「まともな収入のある生活」だけでも、ここでの答えは「上ではいすとりゲームがおこなわれている」であるとして、生田はその解決策を三つ挙げている。

①人を減らす、②いすを増やす、③いすを分け合う

まず、①は無理として、②の「いすを増やす」は、仕事を増やすこと、具体的には「景気の回復（経済成長）」「社会的起業（企業）」「公的就労事業」などがある。そして、③の「いすを分け合う」は、ワークシェアリングであって、成功例としてオランダを挙げている。そして、それと合わせて、ヨーロッパ諸国でのワークライフバランスなども取りあげる。

なお、上記の「カフカの階段」の問題提起と同様に、貧困を社会問題としてとらえ、そこに絡みついた複合的な原因を整理するとともに、具体的な解決方法を実践の場に活かそうとする別の例として、湯浅誠『反貧困——「すべり台社会」からの脱出』（岩波新書、2008年）の「すべり台社会」の問題提起がある。いやむしろ両者ともに、運動の現場の中から原因と解決策を

発見し、検証してきたという点できわめて貴重である。湯浅は本書の「まえがき」で、「一度転んだらどん底まですべり落ちていってしまう『すべり台社会』の中で、『このままいったら日本はどうなってしまうのか』という不安が社会全体に充満している、と感じる」と述べている。

そして、湯浅は本書の第三章「貧困は自己責任なのか」で、貧困状態に至る背景には、「五重の排除」が以下のようにあるとする。

第一に、教育課程からの排除。第二に、企業福祉からの排除。第三に、家族福祉からの排除。第四に、公的福祉からの排除。第五に、自分自身からの排除。

さらに、「貧困はたんに所得の低さというよりも、基本的な潜在能力が奪われた状態と見られなければならない」というアマルティア・センの貧困論を紹介し、生活上の望ましい状態を達成する自由としての「潜在能力」に相当する概念を、湯浅は“溜め^た”（溜池の“溜め”）と表現する。金銭的な“溜め”だけでなく、人間関係の“溜め”や精神的な“溜め”など、いろいろな“溜め”（エネルギー、ゆとり）がある。そして、こうした生活困窮者の“溜め”の拡大のためには、「社会資源の充実」とともに、「当事者のエンパワーメント」が「反貧困」活動を支える両輪として必要となると図示（140 ページ、図 13）している。

同じく、「健康格差」という社会問題の視点から、貧困を社会問題としてとらえて、その複合的な要因を取りあげている、NHK スペシャル取材班『健康格差——あなたの寿命は社会が決める』（講談社現代新書、2017 年）を挙げておきたい。本書の「はじめに」で、WHO（世界保健機関）が「健康格差」を生み出す要因として、所得、地域、雇用形態、家族構成の4つが背景にあると指摘し、「健康格差」を解消するよう各国に対策を求めていることを紹介している。

3. 「カフカの階段」の授業での利用

私はこれまで大学の授業で、この「カフカの階段」図 1 とともに、本書の1章「二人のひろし」の内容を配布資料として利用してきた。それは、経済学科1年生を対象にした「社会経済基礎」という科目の前期（半年）の第2回目である。第2回目は「現代における貧困と格差の現実把握」、第3回目は「現代における貧困と格差の考察」となっており、それぞれの回のテーマ全体の概要とともに、トピックを提供している。このトピック箇所でも当該の図も利用しているが、参考までに第2回目の資料の文章部分も以下に示しておこう。

I 世界の貧困を考える

タレントの黒柳徹子（TV「世界・ふしぎ発見！」や「徹子の部屋」）は、国連のユニセフの親善大使をしているが、アフリカに行った時に、小さな子どもに将来の夢をきくと、思いがけない答が返ってきた。それは、「大人になりたい」。多くの子どもが大人になるま

でに死んでしまうからである。

ユニセフ（国際連合児童基金：United Nations Children's Fund）は、戦後に発足した当初は国連国際児童緊急救済基金（UNICEF：United Nations International Children's Emergency Fund）として創設された。日本もしばらくは主な被救済国の一つであった。現在の名称に変更後も、略称は以前のもを受け継いでいる。

なお、アフリカなどの貧困の大きな原因としては、イギリスやフランスなどのヨーロッパ諸国の植民地として支配されてきた歴史がある。これまでの「世界史」は、「地理上の発見」という表現に見られるように、欧米中心の歴史観で描かれがちであったことも大きな問題である。

II 二人の「ヒロシ」

「ヒロシ」という名前から、何を連想するだろうか。あるいは、ホスト出身のタレント・「ヒロシ」のボヤキ風の自虐ネタを思い出すかもしれない。例えば、「ヒロシです。視力はいいのに、未来が見えません!」。「ヒロシ」は日本の男性の代表的な人名の一つである。

ここで紹介するのは、生田武志『貧困を考えよう』（岩波ジュニア新書、2009年）からである。①造田 博（ゾウタ ヒロシ）は1999年に「池袋無差別殺傷事件」をおこした死刑囚である。1975年生まれ。両親が多重債務で失踪し、岡山県立の進学高を2年で中退。パチンコ店など、数か月ごとに仕事を転々と変わった。②田村 裕（タムラ ヒロシ）は1993年、中学2年生の時に「差し押さえ」で自宅（大阪府吹田市）が無くなり、親もいなくなったので公園で野宿を始めた。近所の人たちが協力して家を借りてくれて生活保護を受けることができた。そして、高校卒業もでき、吉本興業のお笑いタレント養成所 NSC (New Star Creation) に入校し、1999年にお笑いコンビ「麒麟（キリン）」でデビューした。2007年、田村裕の書いた『ホームレス中学生』はベストセラーになり、造田博は死刑が確定。

「お金がない」という「経済的な貧困」だけでなく、「助けあえる関係がない」という「関係的な貧困」が重なったことが悲劇を招いた。

次の図も、『貧困を考えよう』から転載したものである。

失業者は、自殺・犯罪（刑務所）・野宿という究極の選択をせまられている。

この図のイメージ・キャラクターは、大阪市西成区のスラム街（ドヤ街）「釜ヶ崎」の住人・日雇い労働者の「カマヤん」（漫画家ありむら潜〔セン〕の作）

「カフカの階段」は不条理を表す。カフカ（代表作『変身』）は「可・不可」ではない。考えてみよう：「いすとりゲーム」（「自己責任」論による競争）の解決方法

ただし、注意点を1つ挙げる。それは「貯蓄ゼロ世帯」の数値である。「貯金切れ」の説明が、

日銀金融広報中央委員会、2009年により、2人以上世帯で22%となっている。この数値は過大である。これは、外部に委託した世論調査で、標本数も少ない。貧困の増大を訴える研究者や運動団体などでよく利用されているが、もう少し慎重さが求められる。数値としては、厚生労働省の国民生活基礎調査（3年ごと）がある。これによれば、その数値は日銀の約半分である。対比してみると、2001年 日銀 16.7%、厚労省 8.2%、以下、同様に、2004年 日銀 22.1%、厚労省 9.4%、2007年 20.6%に対して 10.2%、2010年 22.3%に対して 10.0%、2013年 31.0%に対して 16.0%となっている¹⁾。

三 「居住の階段」から釜ヶ崎のまち再生ステージへ

「階段」図の発想は「カフカの階段」だけではない。同じくありむら潜による「居住のはしご」（その後、「居住の階段」と改称²⁾）図がある。こちらの方が古い。そして、「はしご」の名称、ならびに着想は都市計画家シェリー・アーンステインが使用した「住民参加のはしご」にヒントを得たとのことである³⁾。この「居住のはしご」は、釜ヶ崎居住問題懇談会（居住懇：1997年設立、2000年から「釜ヶ崎居住 COM」に改称）が提唱したものであり、その図（イラスト）は居住懇「緊急アピール」第1弾で使用されている⁴⁾。ありむらによれば、「居住のはしご」は、地域労働者や野宿者の居住形態は階層状になっており、それを「居住水準」によって並べ直すことからできあがる。

この図を見ると、4階立ての構造になっている。一番下が野宿型、その上が収容型、さらに簡宿型（簡易宿舎型）、アパート型と続く。ここでもカマヤんが活躍している。一つ上の階に上がろうとするカマヤんをアシスト（公・NPO・業界・地元・地域福祉）の矢印が押し上げている。アパートにたどりついたカマヤんはバンザイし、表札には「人間カマヤん」と書かれている。なお、この4階立てのさらに上には、一般都市住宅政策が提示されている。

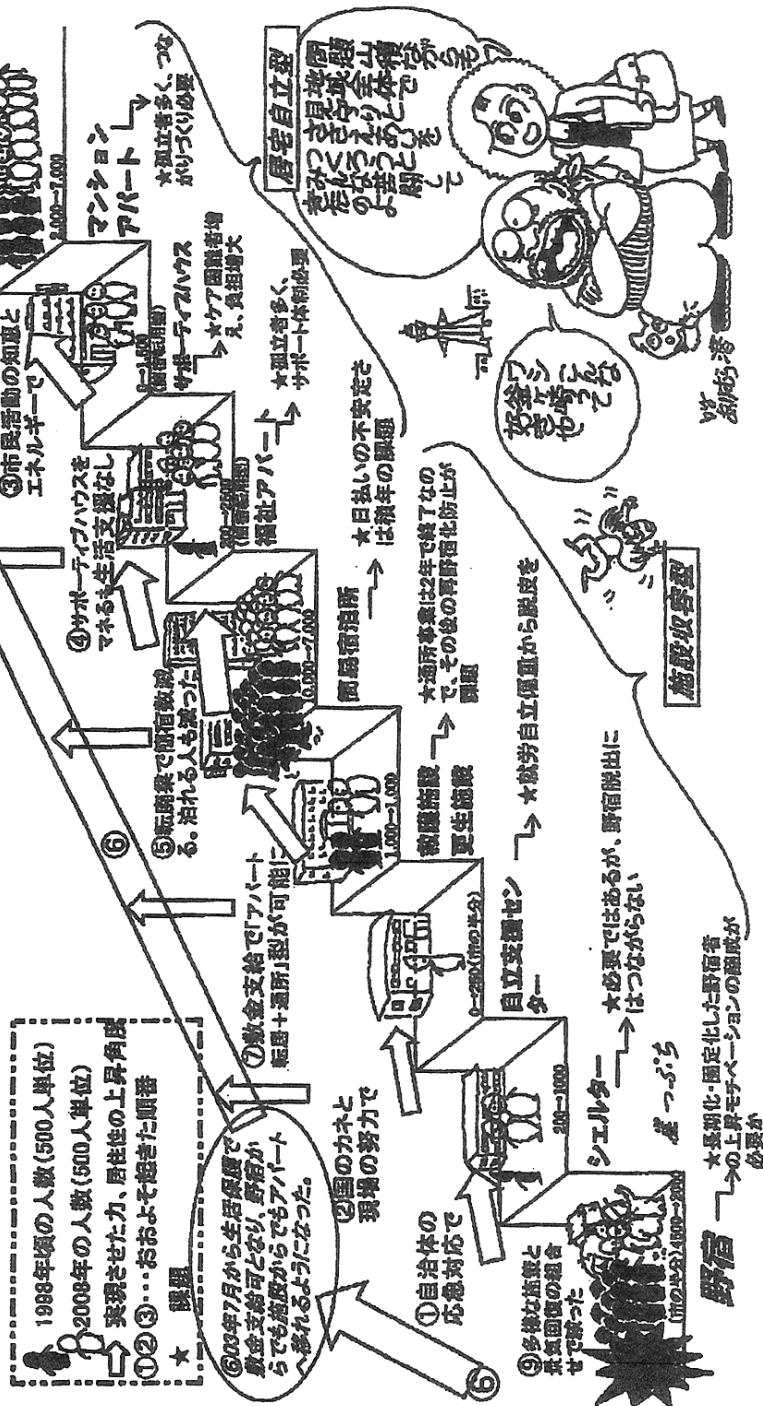
以上を前提にして、つぎに、**図4「居住の階段」論**に進む。この図は8段階にもわたっており、野宿→施設収容型→居宅自立型の様子について、1998年から2008年の10年間をふりかえった「俯瞰図的たたき台⁵⁾」として提供されている。この図の見方のポイントは、8段階の「ステップアップ」の上昇ベクトルを最初につくったものは7段目にある「サポーターハウス」（簡宿転用型の生活支援付き高齢者マンション）だった⁶⁾という点である。

さらにたどれば、簡宿（簡易宿泊所）の「敵視」から「活用できる貴重な地域資源」視へとコペルニクスの転換をおこなったうえで、この簡宿を転用した「サポーターハウス」をも創り出していくアイデア⁷⁾が注目される。

図4 「居住の階段」論

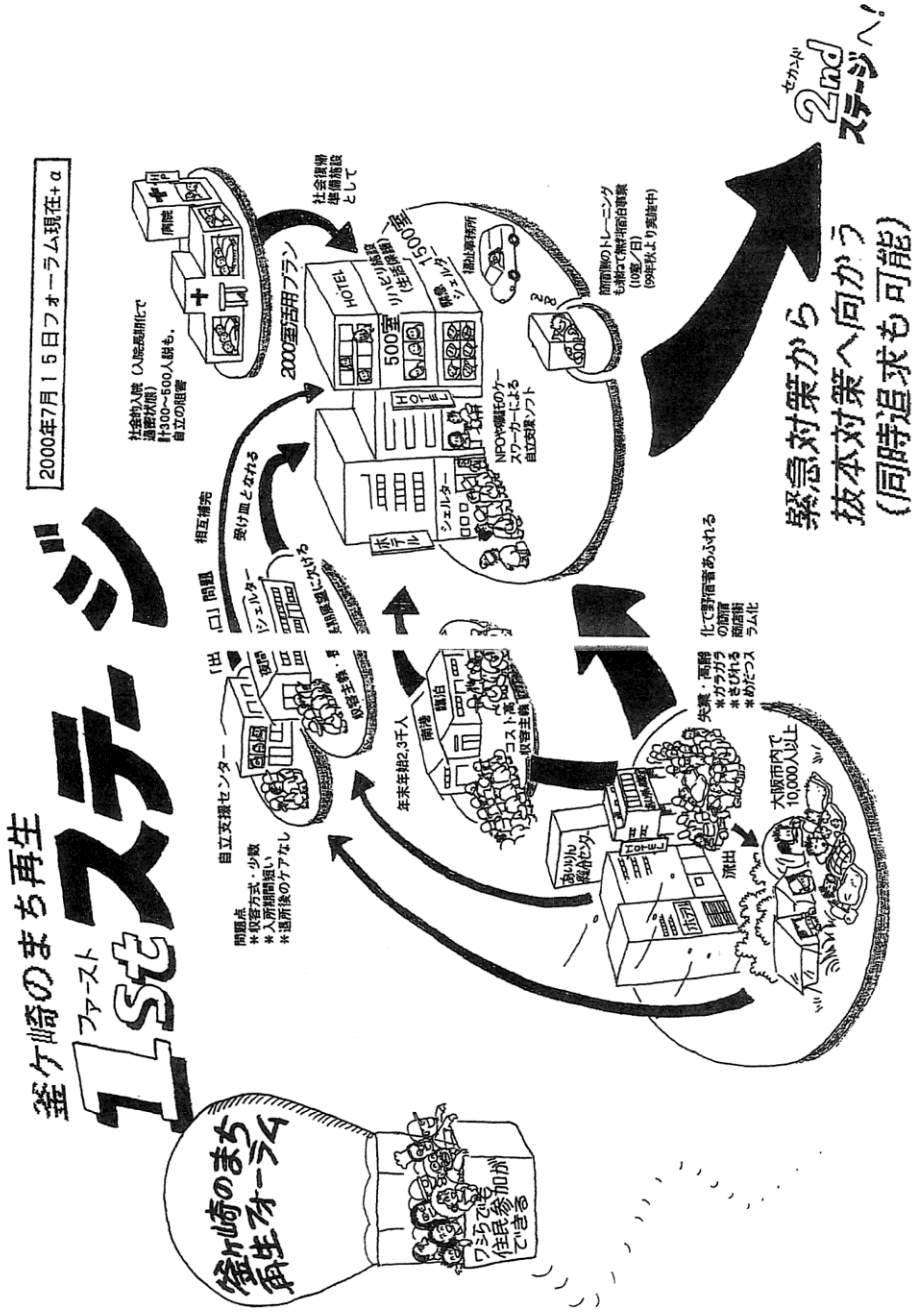
■「居住の階段」論 10年間でふりかえる(未完)

◆釜ヶ崎の日雇労働者・野宿者・生活保護受給者はどう昇ったか？ 次の課題は？



出所：ありむら潜「棲み処としての釜ヶ崎のまちづくり」日本ボランティア学会 2007年度学会誌、2008年、34ページ。

図5 釜ヶ崎のまち再生 1stステージ

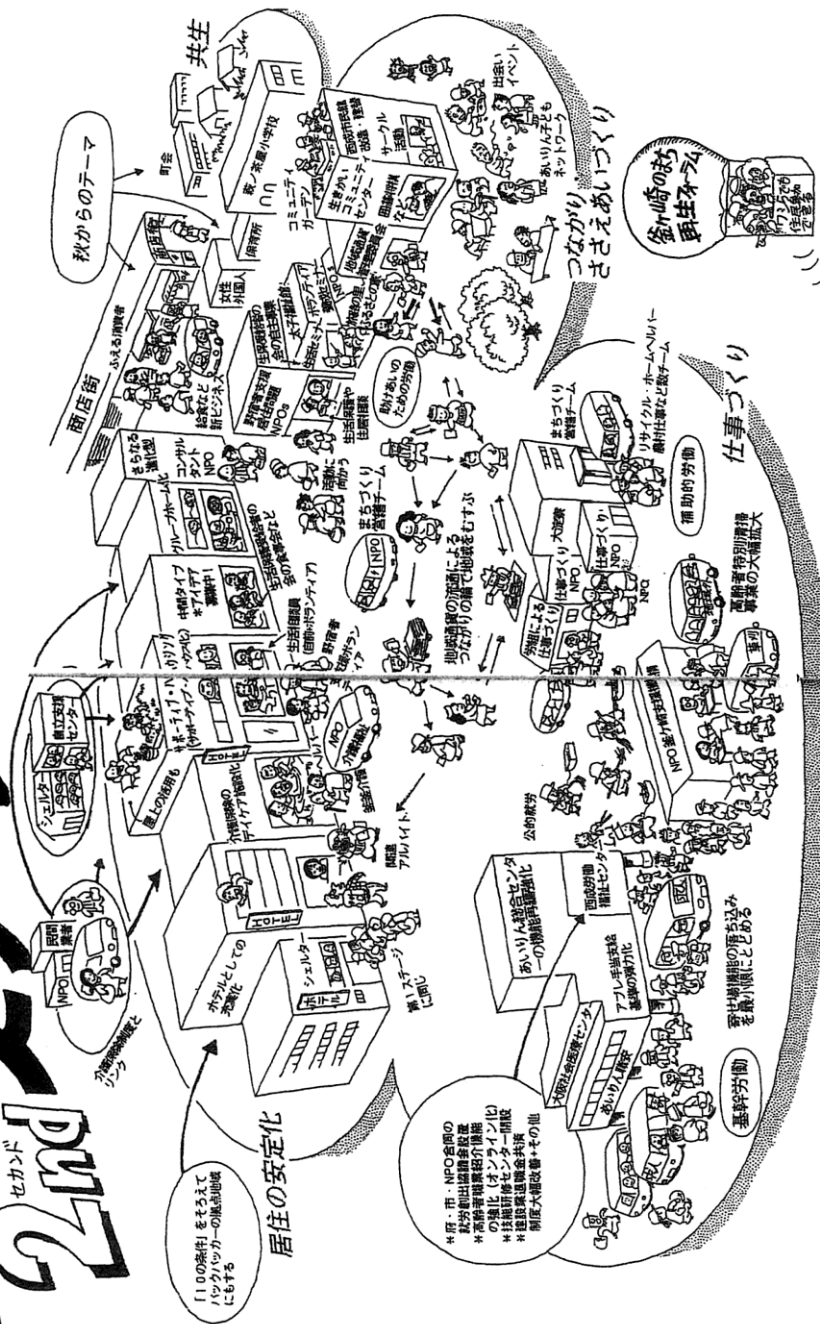


出所：ありむら潜『カマヤんの野暮——漫画 ホームレス問題入門』かもがわ出版、2003年、170—171ページ。

図 6 釜ヶ崎のまち再生 2nd ステージ

釜ヶ崎のまち再生 セカンド 2nd

2000年7月15日フォーラム現在+a



出所：図 5 と同じ、172—173 ページ。

ここからさらに、釜ヶ崎居住問題懇談会（釜ヶ崎居住 COM）の呼びかけで立ち上がった「釜ヶ崎のまち再生フォーラム」の取ってきた手法が以下のようにまとめられている⁸⁾。

- ・ホームレス支援策で終始させず、初めから「誰もが住み続けられるまちづくり」という地域全体の課題とワンセットで取り組んだこと
- ・「ファースト・ステージ（緊急策）」「セカンド・ステージ（抜本策）」等の市民版グランドデザインを提示し、具体化を促進してきたこと
- ・行政のように「就労自立偏重」ではなくて「ハウジング・ファースト」路線を最初から発想してメッセージしたこと

これらは最終的には、「まちづくり第3ステージ」⁹⁾として、「住民参加のはしご（階段）」も構想されている。すなわち、「おっちゃん（住民）参加型」である。

そこで、**図5 釜ヶ崎の町再生 1st ステージ**と**図6 釜ヶ崎の町再生 2nd ステージ**を眺めてみよう。すると、「釜ヶ崎のまち再生フォーラム」と書かれた気球にカマヤンやアイリーンなどが乗っている。乗船部分の外側には「ワシらでも住民参加ができる」と記されている。それだけではない。**図6**をよくよく見ると、街中にもカマヤンがいる。どこにいるかわかるかな？ これは、マーティン・ハンドフォードの絵本『ウオーリーをさがせ！』にもなっている。この図を見る人が、楽しみながら、いろいろなことを考える材料を提供しているわけである。

四 釜ヶ崎のまちスタディ・ツアー

釜ヶ崎では、スタディ・ツアー（街歩き＋解説＋懇談）が日常におこなわれている。これは、ホームレス問題や釜ヶ崎を「学びたい」「役立ちたい」「良い報道をしたい」人を対象としている。さらに、オプションには、「報道関係者コース」「起業&現場スタッフ研修コース」「卒論・修論への援助コース」も設けられている。

また、総合社会福祉研究所が大阪で開催している、社会科学・社会福祉基礎講座（6月から12月：全11日22回）にも、後期初日（2018年10月6日）「フィールドワーク：釜ヶ崎 現代の貧困と子どもの貧困」として組みこまれている。

2018年3月3日（土）午後2時に大阪市立大学・西成プラザに集合して、パワーポイントによる事前レクチャー（ありむら潜）をうけてから、2つのグループに分かれてフィールドワークに出発した。私は幸運にもありむらグループの一員となった。ありむらの極めて精力的で、せっかちで、使命感にあふれた姿にじかに触れることができたのは、それだけで大満足である。地域に溶け込んでいて、あちこちでオッチャンたちから親しげに声をかけられているのが、印象的であった。

配られた資料の中に、私も読者になっている、月刊誌『福祉のひろば』（総合社会福祉研究所）連載の、ありむらによる「ホームレスから日本を見れば」（イラストと文で1ページ分）があった。サポーターハウス「おはな」1階の談話室で入居者（生活保護受給者）3人の話も聞いたが、その3人は、この連載記事に登場している人たちで、似顔絵もよく似ていた。

その資料の1枚目に登場するHさん（71歳）・2015年6月号掲載は、実はこの『福祉のひろば』2018年3月号にも再度登場している。年齢は75歳で、サブタイトルは「財布を拾った生活困窮爺さんのお話」だが、このことは、別れ際に、ありむらから教えてもらった。

あいりん総合センター（地下1階、地上13階）は1969年度に建設され、現在、この建て替え・移転がまちづくりの大きな課題となっている。この総合センターは、2階が吹き抜けになっている。そして、あいりん労働公共職業安定所（国の所管：3階～4階）、大阪社会医療センター附属病院（大阪市：5階～8階）、萩之茶屋第1住宅（大阪市：5階～13階）公的財団法人・西成労働福祉センター（大阪府：3階～4階）、寄り場（大阪府と雇用促進事業団：3階）、寄り場（雇用促進事業団：1階）、シャワー室（雇用促進事業団：地下1階）、日雇い労働者就職援護施設（売店、食堂、理髪店、ロッカールーム）から構成されている、巨大な複合施設である。

1階の寄り場の前ではシェルター並び場の様子を見た。『福祉のひろば』2018年4月号の「ホームレスから日本を見れば」（写真付き）ではクイズになっている。「これは何の風景かな？」答えは、野宿状態にある人々が、通称「シェルター」（臨時夜間緊急避難所：定員550床）に今夜の寝床を確保するため並ぶ列である。5時半オープンだが、3時頃から順番取りが始まり、空のペットボトルからしだいに大きな荷物も並び出す。外国からの研修訪問者たちは驚いて、「コノ荷物ハナゼ盗マレナイノデスカ??」と質問する。それに対しては、「ここは日本だからです」で納得してもらおう。

労働福祉センターでは、「特掃」（55歳以上の高齢者特別清掃事業、公園・道路・草刈などの公的就労）などの説明を受けた。たずね人や無料結核検診、技能講習のお知らせなども目を引くものである。その後、NPO釜ヶ崎支援機構の「特掃」詰所、シェルター、昼間居場所棟、図書室なども見た。

こどもスポーツ広場、炊き出しがおこなわれている四角公園、三角公園、子どもの里、ひと花センター（単身高齢者の社会的つながり再生）、さらに、外国人バックパッカー用にリニューアルされたホテル、中国系の不動産業者によるカラオケ居酒屋なども見た。国際化の一端は、ゴミ捨て場に貼られていた注意書きが数カ国語で書かれていたが、一番最後に見慣れない言語のものが見うけられた。ベトナム語ということだった。

五 カマやんの物語

1. カマヤン誕生と作者ありむら潜

これまでもすでに舞台回しの役割で何度も登場している、カマやんの漫画について改めて見ていきたい。最初は、作者のありむら潜についてである。それは、神田誠司『釜ヶ崎有情』（講談社、2012年）が教えてくれる。ありむらは、本書の「まえがき」と「あとがき」に登場するだけでなく、第一話「ドヤ街の漫画家」の主人公であって、写真も掲載されている。同じく漫画家のやくみつるを連想させる体つきと風貌である。大学卒業後、世の中の深奥を見つけだそうとして「西成労働福祉センター」に就職し、3年間のつもりがそのまま居ついてしまい、定年後の現在もなお、釜ヶ崎のまちづくりの活動を続けている。

釜ヶ崎を笑いで表現したいと思いついて、『漫画の描き方入門』を購入して、独学でマンガを描き始めた。そのうちに、1978年に西成労働福祉センターが、労働者向けの広報紙「センターだより」を創刊し、声をかけられて、4コママンガの連載が始まった。はじめは特定の主人公はいなかったが、やがて「カマヤン」が誕生する。

「カマヤン」は、腹巻き、ニッカボッカに地下たび姿、大阪空襲で孤児になり、天涯孤独。若いとき、貨物船で世界中を回った経験を持つ。涙もろくて、世話好き。単純な性格で、豪放にガハハと笑い飛ばす楽道家。

その人物像は、ありむらが、実際に接した何人かの労働者のキャラクターをつぎはぎしたもののだということだが、よく見ると、ありむら自身と重なって二重映しのようにも見える。つまり、ありむらの分身である。

もっとも、カマやんのマンガの中で、ありむら自身が登場するものも一部にある。『HOTEL NEW 釜ヶ崎』では、ある1話の主人公である。また、『カマやんの夢畑』では、ある1コマの人物の1人として「とりあえず原稿を出すだけの漫画家」で、スンマヘンと誤っている。さらに、『カマヤン漂流記』では、目立たないが本業である労働福祉センターの窓口業務でも登場している。

「カマヤン」の名前は「センターだより」で公募したところ、「釜ヶ崎の赤ヒゲ先生」として有名だった医師の本田良寛（大阪社会医療センター付属病院長）からさっそく電話があって、「おい、『カマヤン』ちゅうのはどないや」ということで決まった。

2. カマやんの物語

カマヤンは神出鬼没であり、いろんなところに現れる。物語の主人公にもなれば脇役にもなる。物陰でながめていたりする。そのときは、何となく場を和ませている。息抜きの役割であ

る。これは、手塚治虫では、キノコ的一种ともいわれている、小さなヒョウタン型で息を吐いている「ヒョウタンツギ」であるし、赤塚不二夫では、ロボットのような顔立ちでホウキを持って、「おでかけですか。レレレのレー？」と声をかける、「レレレのおじさん」である。カマヤんの愛犬カマワンもその役回りである。それでカマワン（笑）。

カマヤんの物語を発行年の順に列挙すると以下のようになる。

- ①『釜ヶ崎<ドヤ街>まんが日記』（日本機関誌出版センター、1987年6月）
- ②『カマヤん漂流記 釜ヶ崎<ドヤ街>まんが日記 パート2』（日本機関誌出版センター、1987年12月）
- ③『釜ヶ崎<ドヤ街>まんが日記3・英訳入り・カマヤんアジア太平洋に行く』（日本機関誌出版センター、1989年）
- ④『HOTEL NEW 釜ヶ崎』（秋田書店、1992年）
- ⑤『^{ニッポン}日本お笑い資本主義 釜ヶ崎<ドヤ街>まんが日記4・英訳入り』（日本機関誌出版センター、1993年）
- ⑥『カマヤんの曲がりかど 釜ヶ崎<ドヤ街>まんが日記5』（日本機関誌出版センター、1998年）
- ⑦『カマヤんの野塾——漫画 ホームレス問題入門』（かもがわ出版、2003年）
- ⑧『最下流 ホームレス村から日本を見れば』（日本居住福祉学会ブックレット、東信堂、2007年）
- ⑨『漫画 ホームレスじいさんの物語 震災・ガレキを越えて カマヤんの夢畑』（明石書店、2012年）

以上は、主に既出の「センターだより」、『福祉のひろば』と日本機関紙協会大阪府本部・月刊『調査資料集』（現『宣伝研究』）、『ヤングコミック』（少年画報社）に収録されたものである。その他に、ありむら潜「釜ヶ崎 いま むかし」（原口剛・稲田七海・白波瀬達也・平川隆啓編著『釜ヶ崎のススメ』洛北出版、2011年）がある。1945年敗戦直前から2010年前後までの風景を描いている。

それでは、第1作①『まんが日記』を開いてみよう。冒頭に、「ズバリ<釜ヶ崎>ご案内」の文章と隣のページにイラストのあんない地図が掲載されている。楽しい地図でカマヤんが16人もいる。

しかし、残念なことが一つある。それは、ここに出ている南海天王寺線が現在は存在しないことである。1984年に天下茶屋—今池町は廃止、1993年に今池町—天王寺は廃止となり、全線が廃止されている。「釜ヶ崎は、地理的には大阪市の中心部のやや南側にあります。JR環状線・南海本線および南海電車天王寺線に囲まれた三角地帯（約0.6km²）を、人々はそう呼んでいま

す」と視覚的にはイメージしやすいことは事実であるが、三角形の斜線箇所は部分的に地下鉄・堺筋線がカバーしているだけである。

もともと、近年の「釜ヶ崎（あいりん地区）周辺要図」（⑦『カマヤんの野塾』）では、鉄道路線は訂正されている。

3. マルクスの資本主義分析

つぎに、⑤『日本お笑い資本主義』に移る。ここでは、ソ連の崩壊により幽閉を解かれた難民マルクスが登場する。なぜか関西弁（ドイツ語なまり）をしゃべる。内容はおもしろいのだが、よけいなことに気づいてしまった。目次の英訳のマルクスが Marx ではなく、Marcus になっている。これは、訳者のデイビッド・メイヤーソンがアメリカ人で、本書が出版された前年の 1992 年にノーベル化学賞を受賞したのがアメリカのルドルフ・マーカス（Rudolph Marcus）だったことがおそらく影響している。

マルクスは不況のドヤ街を見て、自分の本（『資本論』）の理論に満足して喜ぶ。「貧困化法則論だってしっかり生きとるやないか」と。さらに、機嫌良く、エンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』まで持ちだしてくる。しかし、生活費に困ったあげくに、この『資本論』を売ろうとして古本屋に持っていく。「これだけ真理を見通した本や。しかも本人のサインつきや」ということで、めちゃ高く売れると思ったら、実際は「50 円でんな」と冷たくあしらわれてすすぐと帰る。「古本高価買入れ」と書かれているのが、何とも皮肉である。よく考えて見ると、『資本論』という、カネ（貨幣）の運動の原理を解いている本の値段がこれだけ安価ということ自体が大きな皮肉である。

それだけではない。労働者が団結してゆくはずなのにそうではない。また、バブルが破綻して人々が反省する姿を見て、マルクスは人々が自覚し、変革を求めつつあると理論的確信に満ちて、研究論文「日本資本主義論」に没頭する。だが、再びバブル景気が到来して、人々は反省などは忘れ去って、浮かれ騒ぎまくる。マルクスは落ち込み、カマヤんとヤケ酒をあおるという結末。現代日本では、マルクスも目を丸クする事態が続出である。

4. カマヤんと参加型人生へ

それでは、⑥『カマヤんの曲がりかど』に行こう。3章「『危機ざんまい』のニッポン」では、大震災、家族・コミュニティ（地域社会）、超高齢化、労働者生活、自然環境、官僚主義、企業行動、リッパな政治のそれぞれの危機を取りあげている。

末尾の「釜ヶ崎ノート」では、<カマガサキ>と<釜ヶ崎>の二つの側面（あるいは実態）についてありむらが述べている。それによれば、<カマガサキ>は、釜ヶ崎を起点に、各地に

拡散しつつある日雇い労働者のネットワークとその独特の世界をさす。これには、近年の不安定雇用層の急増の中で生み出されつつある新しい日雇い層の星雲状態的存在も含またい。〈釜ヶ崎〉とはそのような星雲を吸い寄せ、萩之茶屋という特定の地域に凝縮して形成されたブラックホールのようなコミュニティをさす。前者はおもに一般的労働問題として現れ、後者では集中して住むことから派生するコミュニティ固有の問題が深刻な形で加わる。このように、ありむらは釜ヶ崎を動態的なものとしてとらえている。

「あとがき」でありむらは心境を語る。今日の日本の混迷からの脱出についての議論や報道を注視していて、あることに気づいた。新しい社会を準備する際に必要なはずの「市民の自己変革」の視点がほとんど欠落している、ということだ。そして、その状況を突破する役割をカマヤんに求めた。カマヤんはその社会の最深部のところで「市民変革ドミノ」の起点になろうとした。カマヤんは革命家である。ただし、それはたいそうなことではなく、「きちんと住む」だけでいい。その意味は、市民社会への再参加である。これまでの「抵抗手段としての民主主義」を乗り越え、「参加する民主主義」の実態をつくる。これが新世紀への入口であり、参加型社会、参加型都市づくり、参加型人生へ、モードを切り換えなければならないと訴える。

5. ホームレス問題からまちづくりへ

こんどは、⑦『カマヤんの野塾』である。まず舞台とキャラクターたちの紹介から入る。大阪市内のいくつかの公園や河川敷に、カマヤん（日雇い寄せ場経由型）、フワフワくん（自分さがしの家出少年。よくさかさまに浮いている）、ななころび七転ヤオキさん（元サラリーマン、リストラ型）、他にサイゴーさん、オークボくん、マルクス先生など、著名人のそっくりさん。

そして、釜ヶ崎には、古い日雇い仲間に加えて、このまちを「単身高齢者でも住み続けられるまち」につくりかえようと運動や事業を始めた新しい仲間たち。アイリーン・コマチ（ネーミングはあいりん地区の地名から：小さなまちづくり NPO の代表。都市計画家、コミュニティワーカー）、はぎきち萩吉ジーンとその仲間たち（支援運動のおかげで野宿からたたみ畳の上にあがることのできた、元日雇いの単身高齢者たち）、まちづくりネットワークの仲間たち（仕事づくりや居住の確保、つながりやささえあいづくり）。

野宿者問題を理解するための 50 のキーワードが配置されていて、索引もついている。いくつかを紹介しておこう。これらのキーワードが小見出しの役割も果たしているので、4 コママンガのテーマとセットで読み進むのがオススメである。

- ・「ホームレス」と「野宿生活者」：この2つは別々。国際的定義では「ホームレス」とは、人たるにふさわしい「適切な住まい」に住む「居住の権利」をおびやかされている状態をさす。簡易宿泊所などに寝泊まりしている状態も意味する。「野宿生活者」は、その中で公

園など野外で寝て生活している人を言う。日本の「ホームレス自立支援特別措置法」では混乱していて、「ホームレス法」としながら内容は「野宿生活者対策」に矮小化されている。

- ・ **日雇い労働者**：日雇い労働者は「野宿をよぎなくされる恐れのある人々」であり、簡易宿泊所住まいの日雇い労働者はすでにその存在自体が（広義の）「ホームレス」状態だ。ここへの対策が予防的意味でとても重要だ。
- ・ **ホームレス問題の総合性**：人がすべてを失って野宿までするという事はよっぽどのことである。実際、雇用・居住・福祉・医療・教育・人権・ジェンダー・宗教・文化などきわめて複合的な問題がごった煮の世界である。だから、対策も支援も広い視野をきたえられる。
- ・ **生活づくり**：釜ヶ崎では「自立」というあいまいな言葉に換えて、生活づくりという用語を使う団体が目につく。なぜなら、恵まれたとは言えない生い立ち等に加えて、人夫出し飯場と簡易宿泊所（ホテル）暮らしをずっとしてきた单身男性たちは初歩的な家事知識すらない場合も多い。そのような人が自立するとは、アパート等での炊事や洗濯、金銭や健康の自己管理、近所づきあいなど、生活実体そのものをあらためてつくっていく、それも自分のテンポでつくっていくプロセスだからである。ちなみに、サポーターハウスはそのためのトレーニングの役割も負っている。
- ・ **就労自立・福祉自立・半就労半福祉型自立**：自立には2通りがある。自活するに足る収入がともなう仕事につけば「就労自立」。しかし、高齢などのため生活保護でサポートされる場合でも自己決定がだいじにされる暮らし方ができれば「福祉自立」と、釜ヶ崎では呼んでいる。現実には、50歳代から65才未満の人々は、自分でできる仕事の範囲内で働き、不足する分を（とりわけ家賃だけでも）生活保護制度で支援してもらおう「半就労半福祉」型の実施を強く望んでいる。
- ・ **エンパワメント**：野宿から脱し、新生活を安定軌道に乗せるためにはその人自身が自分の潜在的力を引き出し、自己決定できる力を高めるなど、パワーアップする必要がある。健康管理や金銭管理に始まり、コミュニケーション力の回復、仕事づくりのための能力開発、文化活動による生きがいがいづくりにいたるまで、釜ヶ崎のまちづくりではさまざまな試みがなされている。マンガでは識字教室を取りあげる。
- ・ **釜ヶ崎のまちづくり**：野宿者激増による地域崩壊を背景に、1999年に始まり、いくつかの注目すべき盛り上がりを見せている。労働運動系からのNPOの誕生、市民運動系の参画、町会住民系の活性化、それらの相互理解とネットワーキングが進展。ソーシャルインクルージョン（社会的包摂）や「社会再参加」が共通の言葉となっているのが特徴。それらの底流にある変化は、すでに5000人の単身高齢者たちが生活保護制度の活用によって量の上

にあがって、定住化が浸透しつつあること。そうした人々が地域と向かい合い、地域参加を課題としつつあること。一人ひとりのケアを通じた支援者側の多様な結びつきの進展などである。

- ・つながり・ささえあいづくり：ただでさえ高齢者はこもりがちなうえに、釜ヶ崎ではコミュニケーションをうまくつけれない人も多い。そこで、地域通貨を使って、楽しみながらそれを克服しようとする試みも始まった。釜ヶ崎での地域通貨（1円＝1カマ）は「つながり・ささえあいづくり」という素朴な目的にしばって、流通促進されている。

付録資料「釜ヶ崎のまちづくり紹介」を見よう。

＜総論＞の「地域状況」から入る。

釜ヶ崎地域は、約2万人の日雇い労働者と約160軒の簡易宿泊所（簡易ホテル）が密集している、寄せ場と呼ばれる労働者コミュニティである。しかし、近年の経済不振と労働者たち自身の高齢化（平均55歳）にともなって、地域内外は数千人規模の野宿者であふれるようになった。これが問題の出発点である。

そして、ありむらの以下の主張が続く。1999年が運動の転換点である。NPO釜ヶ崎支援機構ができ、簡易宿泊所組合も地域貢献路線を打ち出し、釜ヶ崎のまち再生フォーラム等も創設された。行政に本格支援の要請はし続けるとしても、コミュニティの中にある地域資源（古いしきみの中で孤立化し、朽ちかけているように見えるモノやヒトやソフト）を再発見し、住民主導の新しいネットワークで結ぶことで役立つものにつくりかえ、自己変革とエンパワーメントを引き出しあい、「住む能力」を発展させ、参加と自治に向かう。

まるごと「社会的排除」されていた釜ヶ崎が方向転換して、「社会再参加」の道にいっせいに走りだした。これは、地球全体に強まる非営利市民活動の釜ヶ崎的現れであり、カマやんが市民として登場する時代到来である。

つぎに、＜釜ヶ崎のまち再生フォーラム＞に入る。

「フォーラムの目的としきみ」としては、「個人のゆるやかなネットワーク」であり、参加者それぞれが、まずは個々人の自由な立場と自由な発想にたちかえることが強調される。ここですでに紹介した、**図5 釜ヶ崎の町再生1stステージ**と**図6 釜ヶ崎の町再生2ndステージ**をもう一度利用したい。つまり、まち再生の全体像（緊急対策と抜本対策）の広大な見通しを提供している。それが、気球の意味するところである。

「具体的な活動内容」としては、これまでも見てきたが、少し付け加えておこう。安否確認巡回事業、「釜ヶ崎ボランティア養成講座」開講、「投票へ行こう！ 社会再参加キャンペーン」実行委員会、「野宿生活者の社会復帰を実現するモデル区域」での新しい町会結成、さらに、西成市民会館建て替え＝「地域福祉総合センター」化、地域のあらゆる人々との共生をめざし

た次なるまちづくりビジョン（ネクストステージビジョン）の策定である。

そして、「失敗もある」として、運動が進むにつれて、個性や手法、利害のぶつかりあいも生じることから、人と人の「信頼と敬意」の関係づくりが何よりもたいせつだと結んでいる。

「あとがき」では、前作『カマヤんの曲がりかど』（1998年）以後の5年間、作者のありむらは自らが運動に没頭していたことと、前作では暗黒の90年代の社会崩壊とその中でのカマヤんの個人的意識転換＝曲がりかどがテーマだったことを語っている。そして、1999年になって、釜ヶ崎にも運動の根本的な転換が訪れ、ありむら自身も同じく転換し、さらにその二重映しとして、当然ではあるが、物語の主人公カマヤンも転換するというのが、本作『カマヤんの野塾』（2003年）である。

おもしろいことに、こんなことも書いている。「まちづくり運動における漫画キャラクターの役割」。どなたかこのテーマで1本論文を書いてほしいと思いますと。

本稿は、ありむらのこのつぶやきも意識して書いている。シリーズ全体の書評の意味もこめている。ただ、「カマヤン」本とも言うべき、カマヤンのシリーズは絶版なので一般書店では手にすることもできない。古本をネットで注文するしかないのは残念至極である。

6. どん底から新しいふるさとづくりへ

最後に、⑨『カマヤんの夢畑』である。

舞台背景と時代背景が違ってくる。釜ヶ崎以外に、川べりのホームレス・テント村、リーマンショック（2008年）後の山の中の限界集落、東日本大震災（2011年）被災地。

つぎに、物語のキャラクターたち。主に新人を紹介しよう。

カマワシ：釜ヶ崎の野良犬。というよりコミュニティ・ドッグ。カマヤンのトモダチ。伴走的パーソナル・サポーター。

ディビッド：NPOのボランティア。テキサスから卒論書きにやってきて釜ヶ崎にはまり込んだ。

通称マルクス先生：幽閉先のソ連崩壊（1991年）に伴い、釜ヶ崎に逃れて静養中。今は生活保護で暮らし、引きこもりがち。カマヤンと行く立ち飲み屋の大阪名物ドテ焼きと梅クラゲがすき。

本文は、カマヤンの回想・記録（4コママンガ）とありむら潜のコラム「新しいふるさとづくりへのつぶやき」（イラスト付き）25回が併行する。

行旅死亡人（行き倒れ）、刑余者（満期受刑者などの処遇）問題の次には、釜ヶ崎の本質が語られる。「日本列島総釜ヶ崎化」という言葉がいまや警鐘用語ではなく、「ニッポンの現実」となった。釜ヶ崎の本質は、①日雇いという非正規雇用労働者の極度の集住地域。②家族・社会

的諸集団どころか自分の過去とさえいっさいのつながりを断ち切った（断ち切られた）極度の無縁状態の人々の集住地域。この両面が一体化したのがカマガサキだ。地理的概念ではなく、貧困の「状態」概念にすら、ありむらには思える。

以上の①②のうち、これまではもっぱら①に起因する問題が貧困の基軸だと考えられてきたがそうではなかったことをありむらは指摘する。生活保護を受けて人々は幸福になったか。ノ一だ。アパートでの生活保護になり、唯一あった、労働を通しての社会参加の実感を失い、むしろ孤独と空虚感は深まった。つまり、人間論、幸福論的には②の問題こそ重要なのだ。遅れて釜ヶ崎化した日本列島各地はこの教訓に学ぶべき。「つながりの再生列島」をめざすべき。なお、ここで提供されている日本列島のイラストにはカマヤんが11人。

お次は、日雇い版「定年退職前準備支援プログラム」が必要という話である。Aさんは恒常的野宿から救急車で病院へ。以後は施設収容と社会的入院と再野宿。Bさんは公的窓口や支援団体などにつながって、「半福祉・半就労型」のアパート生活に移り、その後「全生活保護型」に。タイトルは「カマヤんはどっちになるのかな？」である。

今度は、セーフティネットの「アフター」より「ビフォー」の重要性を説く。ホームレス問題とは、問題が極限化してからの問題であって、セーフティネットをはさんで、「アフター」の世界である。そうなる前に、「ビフォーの世界でなんとかせいでよ」、つまりそもそもはセーフティネットに近づかなくてもすむようにするのが一番いい。そのためには、国民一人ひとりが、労働・家庭・教育・人と人とのつながり・地域、とりあえずこの5つの領域で「力をつけておく」ことだ。「子供の時代に力をつけること」だとも言える。

ベーシック・インカム¹⁰⁾という政策をアイリーンが説明している。すべての国民にたとえば8万円とかを毎月無条件に支給するしくみ。子ども手当も年金も生活保護も全部統合して社会保障の基礎部分として払う究極の政策である。そこで、サイゴーさんが「そういえば釜ヶ崎では多くが生活保護をもらってるから、もう実現してるようなもんや」と言えば、カマヤんが「そう、ベーシック・インカマや」とオチが来る。

「New ニュー日雇い」のススメに入る。一人ひとりへのサポート現場での実態の話だ。カマヤんたち「オールド日雇い」、そしてフワフワくんたち「ニュー日雇い」（スポット派遣）のように、「断続的な仕事なら継続的に」働ける人もかなりいる。こうした「オールド」や「ニュー」を教訓に、「New ニュー日雇い」を勧める。つまり、日雇い仕事を継続しながら、支援付き住居の安定確保やつながりづくりを模索し、支援を受ければいい。シンプルに考え、ゆっくり次のステップ・アップをめざせばいいのだと。

同じく、孤立しがちな人たち全般への支援策として、ありむらたちはコレクティブ・タウン（造語）という考え方を広め始めた。それは、人々のゆるやかなつながり・やわらかい参加で

あって、強い連帯ではない。それに合致するしくみづくりのヒントは釜ヶ崎にある。居住政策不在のおかげで、人々の住居は簡易宿泊所の、ただ寝だけの狭小な個室である。本来居室内に持つべき生活諸機能が路上や公園に外延的にあふれていかざるを得ない。人々はどこでも創造的に気ままに「ひろば」として使う。そして、「ひろば」とは現代のキーワード＝「居場所」と同義語になる。釜ヶ崎はいわば天然のコレクティブ・タウンだ。北欧発のコレクティブ・ハウジングが「建物にコミュニティ（まち的要素）を組み込む」のに対して、「まち（コミュニティ）を住まいの一部として」とらえる。コレクティブ・タウンの成立要件は、ハードの問題よりも、空間の利用のしかただと結論づける。

ありむらの「つぶやき」の最後は、「定年退職にあたって」である。「どん底で見てきたもの」は、マルクス風にいえば、「一つの極での貧困の蓄積」の実にわかりやすい事象の数々であった。しかし、見るだけなら、解釈するだけなら、達成感につながらない。そこで、「どん底でしてきたこと」が続く。労働福祉センターでの仕事にとどまらず、その狭い枠組みに閉じこもらなかったという達成感がある。一つは、漫画で地域に社会に発信し続けたことである。もう一つは、1999年に釜ヶ崎のまち再生フォーラムを仲間たちと創設し、まちづくりによる状況打開の事例群をつくり得たことである。

結論として、「貧困が蓄積する一つの極」は実は社会的に排除された人々にとっては「そこ自体が丸ごとセーフティネットや居場所になりうる」というパラドックスを釜ヶ崎の人々全体で創り出したということが導かれる。『資本論』を抱えたイラストのマルクスも、「釜ヶ崎だからこそ救われるという、ある種のパラドックスだね」と満足げに納得している。

「あとがき」は～漢方薬「カマヤん」のススメ～となっている。本巻のセールスポイントとして、伴走的記録者かもしれない、「ガレキの中で生きる達人たち」から何かを学べる、どん底の笑いを考える材料にできるかも、の3つを挙げている。

そして、ありむらは、人間社会というものはどん底ですら笑いがあるものなのだ、人間とはもろく弱く同時に、そうした強さがあることを感じて安心してほしい。人間社会とはそういう「奥ゆき」があるものだというのを、特に若い人たちに感じてほしいと語る。

以上、ここまでカマヤんの物語を取りあげてきたが、その内容はチャップリンを連想させるものがあつた。チャップリンは、漫画と同じく、活字とは違った、映画という映像の手段で、貧困などの社会問題を笑いを武器にして取り扱い、観客を楽しませるとともに勇気づけてきたことが印象的である。チャップリンいわく、「笑いのない1日、それは無駄になった1日です(A day without laughter is a day wasted.)」。

もう一つ付け加えておきたい。カマヤんの物語の舞台が釜ヶ崎であることは周知のとおりだが、そこが日本の笑いの本拠地である大阪の一角だという背景である。大阪は商人の町として

栄えてきたが、そのためにコミュニケーションが極めて重視され、その重要な構成要素として笑いが欠かせないものだった。「商都」が同時に「笑都」であったゆえんである。以上、ショートショート。

六 もう一つの「日本列島総釜ヶ崎化」

1. 「移民都」だいおおさか 大大阪

大阪という西日本随一の大都市の持つ、貧困集中地域を生み出す歴史的な空間構造の特性を把握しよう。これについては、水内俊雄「大阪の困窮化の歴史的背景と西成区への貧困集中の実態」（貧困研究会『貧困研究』Vol.9、2012年12月）が明らかにしている。それによれば、伝統的な「商都」に続く「工都」は、中心部の「商都」をとりまく周辺部に広がり、「煙の都」とも呼ばれ、それを支える人々は、移民として大阪に劇的に流入し、中心部のまわりに、同心円状に職員の街、工場労働者の街、それを支える街角商店街や盛り場が、まわりに張り付いてできてゆく。「移民都」の誕生である。その移出元は遠く朝鮮半島にも及ぶ。

移民が持つ社会経済的な脆弱性は、被差別部落民、日雇い労働者、朝鮮半島出身者、南西諸島出身者などが集住する地区により強く出る。行政区全体にその特性が強く見られるのは、大正区のリトルオキナワ¹¹⁾であり、生野区の 코리아タウン¹²⁾である。この脆弱性を克服し、「移民都」の保持・再生産をはかるために、行政による伝統的な都市社会政策、福祉施策、同和対策事業、そして釜ヶ崎（あいりん地域）への施策が存在してきた。

2. インナーシティの形成と「ホームレス問題」

資本主義の発展は、農村から都市への労働力としての大規模な人口移動をもたらした。これが、上記の「工都」誕生の原理であるが、その都市部においても、資本主義的蓄積の、一方における富の蓄積、他方における貧困の蓄積の地理的な対比構造がつくりだされる。労働者層においても、都市郊外への住宅の移転が進行するとともに、「インナーシティへの貧困や不安定労働・居住の集積と囲い込み」¹³⁾が併行する。「スラム」の形成である。

さらに、釜ヶ崎については行政施策の展開がある。以下、具体的な釜ヶ崎対策の二つの方向性について、原口剛の整理によって見てゆきたい。「第一に家族持ちの労働者に対しては、釜ヶ崎地域外の公営住宅が斡旋され、釜ヶ崎からの分散化が企図された」¹⁴⁾。しかし、「第二に、各地の農村や炭鉱等から流入する単身男性の労働者に対しては、むしろ釜ヶ崎への流入が促進された」¹⁵⁾。これらの結果、「七十年代には釜ヶ崎は、日雇労働市場や簡易宿泊街としての性格はそのままに、単身日雇労働者が過度に集中する地域へとその姿を塗り替えられ、以後は日雇労働

働力の供給地（寄せ場）として政策的に放置された」¹⁶⁾。そして、「九十年代に入り高齢化した日雇労働者の大規模な失業と野宿という形で噴出し、都市全域へと拡大するに及び、ようやく『ホームレス問題』として認知されるに至った」¹⁷⁾。

合わせて、釜ヶ崎は変容を続ける。まず、出発点として、釜ヶ崎は、「次の三つの空間性が折り重なることによって形成されていた。『不安定労働の空間』『ホームレス＝不安定居住の空間』そして『ホームレス＝野宿の空間』」¹⁸⁾である。これら「三層の空間性を凝集させた場所」¹⁹⁾こそが、「釜ヶ崎」という地名に他ならない。そして、この「釜ヶ崎」は携帯電話とネットカフェという情報技術の飛躍的な進化によって、その存在基盤が大きくゆらぐことになる。原口はその結論として、「現在進行中の『社会の総寄せ場化』にともなう都市再編のありようを、『地名なき寄せ場』と呼ぶ」²⁰⁾とする。

そして、この「地名なき寄せ場」の問題点として、「権力による日雇労働者の集中・管理、監視を示唆」²¹⁾する「寄せ場」という呼び方に対抗的で、「労働者が寄り集まるという主体性を強調する呼び方であり、そこには寄り集まることにより労働者が集団的主体へと転化する可能性が含意されている」²²⁾「寄り場」の側面の欠落を挙げている。

3. もう一つの「日本列島総釜ヶ崎化」

ありむらは、「大阪・釜ヶ崎に関する3冊の新刊書をめぐって」という合同書評会²³⁾で述べている。まず、1987年に『釜ヶ崎<ドヤ街>まんが日記』シリーズ第1巻を出し、ここで「日本列島総釜ヶ崎化」を書いた。その理由として、パートや人材派遣が主流になるだろうからと書いた。その後、この「日本列島総釜ヶ崎化」がネガティブな意味で使われるようになったが、違う意味で「もう一つの日本列島総釜ヶ崎化」を提唱したいとする。それは、支援体制の面でということである。

もう一つある。「釜ヶ崎」は、ある時点までは一つの地名だった。しかし、70年代に入り、この頃から「釜ヶ崎」は、地理的概念ではなく、貧困の独特な状態を指す概念になったのではない。「釜ヶ崎」とは、日雇という非正規雇用、不安定雇用の形態と究極の無縁状態の二つがワンセットになった貧困のことである。だから、非正規化と無縁化が列島全体に広がっていくのは、「日本列島総釜ヶ崎化」ということになる。しかし、上記のように支援体制が進んでいくと、「もう一つの日本列島総釜ヶ崎化」が求められ、誕生していくことになる。

以上のありむらの意見に見られるように、これが、1999年にもたらされた大転換であり、『釜ヶ崎<ドヤ街>まんが日記』シリーズでは、『カマヤんの野塾』（2003年）以降に対応するまちづくりの実践である。当初の作品ではネガティブな意味で表現されていた、「新首都」²⁴⁾や「地下の首都」²⁵⁾は、今や大手をふって、「地上の新首都」になってもおかしくはない。

おわりに

釜ヶ崎は、守護神カマヤンが道案内で先頭に立って、汚名返上の過程にあることが理解できる。「まちづくり第3ステージ」⁹⁾として、「おっちゃん（住民）参加型」が展望されているが、これは生活困窮者としての釜ヶ崎住民が福祉施策の対象として保護される存在ではなく、自ら積極的にまちづくりにかかわる存在に変身することである。つまり、客体から主体への転化である。

保護される対象から主体への逆転は、障害者問題においても同様な過程を見出すことができる。それは、重症心身障害児施設「近江学園」を創設した糸賀一雄の思想と実践である²⁶⁾。『この子らに世の光を』あててやろうというあわれみの政策を求めているのではなく、この子らが自ら輝く素材そのものであるから、いよいよみがきをかけて輝かそうというのである。『この子らを世の光に』である²⁷⁾。糸賀はクリスチャンであり、新約聖書のマタイ伝5章の「塩のたとえと光のたとえ」の箇所に記載されている「あなたたちは世の光です」が影響していると考えられる。苦しくつらい状況からの反転として、世の中全体の見直し、組み立て直しの論理である。障害者の視点からのまちづくり、バリアフリー、社会の側を変えていく社会リハビリテーションなどが同じく共通している。

卑近な例としては、トランプ・ゲームのツー・テン・ジャックが連想できる。得点の多さを競うのだが、マイナス札であるスペードの得点札（A [エース]：マイナス15点を始めとした）6枚（合計でマイナス55点）をすべて集めればプラス（55点）に反転するというルールである。つまり、オセロ・ゲームで言えば、黒がすべて白に変わるようなものである。

釜ヶ崎の新しいまちづくりはダイナミックに現在進行中である。「遅れて釜ヶ崎化した日本列島各地」²⁸⁾は、先進地域である釜ヶ崎の今後の動向から目を離さず、共に新しい社会づくり、国づくりの道を歩んでゆきたいものである。

なお、2015年4月には、国の制度としても生活困窮者自立支援法が施行され、全国各地で新たな活動が展開されている。

また、最近出版された参考文献として、生田武志・稲葉剛・芦田麗子『当たり前生活ってなんやねん?! 東西の貧困の現場から』（日本機関誌出版センター、2018年）を挙げておきたい。そこで、稲葉が「カフカの階段」について紹介している。生田のホームページを見るか、「カフカの階段」と検索するといいと（29ページ）。

それによれば、「カフカの階段」がヴァージョンアップされて、より詳細になっている。最新は、Ver. 2018/01/11である。

<注>

- 1) 詳細は、福島利夫「貧困・不安定就業と生活保障システム」宮寄晃臣・兵頭淳史編『ワークフェアの日本的展開——雇用の不安定化と就労・自立支援の課題』専修大学出版局、2015年、216—218ページ。
- 2) ありむら潜「^{ハレックスト}棲み処としての釜ヶ崎のまちづくり」日本ボランティア学会 2007年度学会誌、2008年、31ページ。
- 3) 同上、45ページ、【注】1)。
- 4) 金川めぐみ「ホームレスと居住政策」塩崎賢明編『住宅政策の再生』日本経済評論社、2006年、220ページで引用されている図 11—1「居住のはしご」。
- 5) ありむら、前掲、33ページ。
- 6) 同上、35ページ。「サポートティブハウス」の定義＝あいりん地域で生まれた、保証人・保証金不要の、簡易宿泊所転用型生活支援付き共同住宅。詳細は、同上、45ページ、【注】3)。
- 7) 同上、33ページ。
- 8) 同上、41ページ。
- 9) 同上、44ページ。
- 10) 詳細は、山森亮『ベーシック・インカム入門』光文社新書、2009年。
- 11) 橋爪紳也『^{だいおおさか}大大阪の時代を歩く』洋泉社、2017年、118ページ—121ページ。
- 12) 同上書、122ページ—125ページ。
- 13) 原口剛「地名なき寄せ場—都市問題とホームレス—」西澤晃彦編『周縁労働力の移動と編成』大月書店、2011年、165ページ。
- 14)、15)、16)、17) 同上書、166ページ。
- 18) 同上書、183ページ。
- 19)、20) 同上書、184ページ。
- 21)、22) 同上書、185ページ。
- 23) 「合同書評会報告 大阪・釜ヶ崎に関する3冊の新刊書をめぐって」貧困研究会『貧困研究』Vol.19、明石書店、2017年12月。
- 24) ありむら潜『釜ヶ崎<ドヤ街>まんが日記』日本機関誌出版センター、1987年、27ページ。
- 25) ありむら潜『カマヤン漂流記』日本機関誌出版センター、1987年、54ページ。
- 26) 河合隆平「発達保証の水源——糸賀一雄の思想と実践に学ぶ」荒川智・越野和之＋全障研研究推進委員会編『障害者の人権と発達』全国障害者問題研究会出版部、2007年。
- 27) 糸賀一雄『福祉の思想』NHK出版、1968年、177ページ。
- 28) ありむら潜『カマヤンの夢畑』明石書店、2012年、37ページ。